

～前期試験迫る。3年生には伸びしろしかない！～

共通テスト実施から、早くも1ヶ月が経過し、国公立前期試験まであと10日となりましたが、受験を控えている3年生は準備に向けて順調でしょうか？すでに受験を経験してきた生徒もいますが、どうか自分が納得できる結果が出るまで全力を尽くしてください。本番を直前にして不安で苦しんでいる生徒もいると思いますが、大所高所で見れば、君たちが人間として成長するために用意されているものだと考えることもできます。「**経験する苦しみや困難は、すべて自分の成長のためにある**」ということを理解し、自分がそれに対応できるかどうかということを手問自答してみてください。苦しみや困難や面倒くさいことを「嫌なもの」「来てほしくないもの」だけで考えて対応するなら、そこに自らの成長はないと思います。また、いよいよ現在の日本は**自分がどう生きるかを自分で決めないといけない時代となりました**。何を目指し、どのように生きていくか、それを自己決定することが要求されてきています。民法も改正され、成年年齢も引き下げられました。君たちは受験に際して、志望校決定などにおいて責任をもって決断をしたと思いますが、選んだものに誇りをもち、全力で挑んできてください。君たちの選択と奮闘に対して心より敬意を表し、最後まで我々も君たちのためにできることをしていきたいと思います。

さて、私は最近、ある講演会に参加したのですが、その講演の中盤に講師から哲学者の鷲田清一先生の名前が出てきました。その時、鷲田先生が大阪大学総長時代の平成22年度に卒業式で話された式辞の事をふと思い出したので、今回その一部抜粋を紹介します。

平成22年度卒業式・大学院学位記授与式総長式辞

みなさんはさまざまな専門の勉強と研究を一区切りとして終え、これから社会の現場に出てゆかれます。そして何かのプロフェッショナルとしてみずからを鍛え上げてゆかれることでしょう。ここで心に留めていただきたいのは、プロフェッショナルが専門性を十分に活かすためには、専門の知識だけではどうにもならないということです。一つの専門性は他の専門性とうまく編まれることがないと、現実の世界で専門性を全うすることができないからです。一つのアイデアを制度として定着させようとするとき、一つの発見を医療の現場で活かそうとするとき、法律や経理、広報といった別のプロフェッショナルたちと組まなくてはなりません。別の領域のプロフェッショナルと同じ課題に共同で取り組むことができるためには、自分の専門的知見について、別の専門家に正しく理解してもらえよう、みずからの専門についてイメージ豊かに説明することが必要です。彼らにその気にならせないといけないからです。そして異なる分野のプロフェッショナルたちのこだわりを理解し、また刺激するような訴えかけをしなければなりません。別のプロの異なった視線を理解しようとせず、自分の専門の内輪の符丁で相手を抑え込もうとする人は、専門家として失格なのです。ここでも隔たりをしっかりと見つめるということが大切です。同じことは医療スタッフについても言えます。プロとしての自分たちの思いとは隔たったところでものを感じている患者さんの思いに、想像力をはたらかせられない医療スタッフは、プロとして失格なのです。みなさんは学業において優秀な成績をおさめられ、社会に出てもさまざまな場所でこれまた優れたリーダーたることをめざしておられるかもしれませんが、忘れてはならないのは、だれもがリーダーになりたがるような社会はすぐに壊れるということです。一つの事業を成し遂げるには、リーダーとともに、脇役や黒子やコマが要ります。昨今、リーダー論の本が溢れていますが、そもそもリーダー論に素直に従うような人はリーダーになれないということもあります。リーダーたる人は前例を踏襲せずに、みずから道を開いてゆく人であるはずだからです。リーダーシップについて論じ、なんとも深い味わいがあるなあと感じた言葉があります。それは、パナソニックの創業者、松下幸之助さんが職員の前で話した言葉です。松下さんは「成功する人が
(次ページへつづく)

備えていなければならないもの」として、「愛嬌」と「運が強そうなこと」と「後ろ姿」という、三つを挙げました。**理由はあえて説明せずにです**。この三つについて、こんなふうに解釈しています。「愛嬌」のある人にはスキがあります。突っ走って転んだり、情にほだされていっしょに落ち込んでしまったりする。だからまわりをはらはらさせる。しっかり見守っていないと、という思いにさせるわけです。次に、「運が強そうな」ひとのそばにいと、何でもうまくいきそうな気になるものです。その澁刺とした晴れやかな空気に乗せられて、一丁こんなこともやってみるかと思ふ冒険的なことにも挑戦できます。次に、だれかの「後ろ姿」が眼に焼きつくときには、見ているほうの心に静かな波紋が起こります。寡黙な言葉の背後に秘められたある思いに想像力が膨らむのです。あの人は何にこだわっているのか、ついそのことを考えてしまいます。そう、見る人を受け身ではなく、能動的にするのです。無防備なところ、緩んだところ、それに余韻があつて、それが他人の関心を引き寄せてしまうからです。軸がぶれない、統率力があるといった心得も大事でしょうが、この隙間、緩みこそ、人の関心を誘いだすものなのです。組織とは言うまでもなく人の集団です。そして、一人一人が受け身で指示を待つのではなく、それぞれにそれぞれの能力を全開して動くそのときに、組織はもっとも活力と緊張感に溢れます。一人ひとりが自分の頭で考え、へこたれずに行動できる組織がいちばん活力があるのです。そういう意味では、リーダーがいなくていい組織を作れるのが真のリーダーだと言えるかもしれません。みなさんに卒業後求められるのは、専門家としての技を磨くことであるとともに、「成熟した市民」「賢い市民」になることです。市民社会においては、リーダーは固定していません。**市民それぞれが社会のそれぞれの持ち場で全力投球している**のですから、だれもいつもリーダー役を引き受けられるとはかぎりません。だとすれば、それぞれが日頃の本務を果たしつつ、public affairsについては、あるときは「いま仕事が手を抜けへんのでちょっと頼むわ」「本業のこと、心配なんやろ、しばらくおれがやっとくわ」というふうに、**それぞれが前面に出たい背後に退きたいしながら、しかしいつも全体に目配りしている……**そういうメンバーからなる集団こそ、真に強い集団だということになるでしょう。(中略) その意味では、リーダーシップとおなじくらい、**フォロワーシップが重要**になってきます。自分たちが選んだリーダーの指示に従うが、みずからもつねに全体を見やりながら、リーダーが見逃していること、見落としていないかというふうにリーダーをケアしつつ付き従ってゆく、そういうフォロワーシップです。良きフォロワー、リーダーを真にケアできる人物であるためには、フォロワー自身のまなざしが確かな「**価値の遠近法**」を備えていなければなりません。「**価値の遠近法**」とは、どんな状況にあつても、次の四つ、つまり**絶対なくしてはならないもの、見失ってはならぬものと、あつてもいいけどなくてもいいものと、端的になくていいものと、絶対にあつてはならないもの**とを見分けられる眼力のことです。映画監督の河瀬直美さんの言葉を借りていいかえると、「忘れていいことと、忘れたらあかんことと、それから忘れなあかんこと」とをきちんと仕分けることのできる判断力のことです。こういう力を人はこれまで「**教養**」と呼んできました。昨年亡くなられた文化人類学者の梅棹忠夫さんは、亡くなられる直前のインタビューにおいて、いつも全体を気遣いながら、自分にできるところで責任を担う、そういう教養のあるフォロワーシップについて語っておられました。そしてその話をこんな言葉で結ばれました。「**請われれば一差し舞える人物になれ**」。もしリーダーに推されたとき、いつでも「**一差し舞える**」よう、日頃からきちんと用意をしておけ、というのです。わたしはみなさんに、**将来、周囲の人たちから、「あいつにまかせておけば大丈夫」とか「こんなときあの人がいたらなあ」と言ってもらえる人**になっていただきたいと心から願っています。そう、**真に教養のあるフロになっていただきたい**のです。そのために大学に求むるものがあれば、いつでも大学に戻ってきてください。大阪大学はそうした学びの場をいつでも開いておきます。(後略)

以上です。全文は大阪大学のHPに掲載されているので、機会を見つけて閲覧してください。

https://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/president/files/h23_shiki_ji.pdf

3年生はプロの受験生として、卒業後は真に学ぶプロとして精進してください。また、1年生、2年生は学校も一つの市民社会であることを自覚し、西高生としての責務を果たしてください。

(文責・松村)